

別海町立西春別小学校 学校だより



からまつ No.13

平成30年10月17日発行 発行責任者 校長 金森 卓哉

「わくわく」する気持ち

校長 金森 卓哉

ツルウメモドキも皮が割れ中の実が顔を出し、赤と黄色だけとなった弦か萩の終わりを告げているようです。学校の敷地内では、広葉樹の落ち葉が強い風に飛ばされ舞う姿が見られております。

学芸会が終わり、特別時間割も終了し普通の学校生活に戻り学習を進めております。2学期も残り2カ月、しっかり学習する力をつけてまいります。全校朝会では、後期の委員会活動について3つの委員会から活動目標やこれから半年間の活動計画が発表されました。3つの委員会とも積極的な活動を通して学校を楽しいものにしていくという発表でした。

先週だったでしょうか、北海道新聞に「ピリギャル」という題名で映画化され、そのモデルだった「小林さやか」さんの記事が載っておりました。彼女は、ある私立女子校で学年ピリの成績のギャルと呼ばれるような学生でしたが、1年で偏差値を40も上げて、私立大学最難関の慶応大学に現役合格したのです。その頃の彼女は「聖徳太子」を「せいとくたこ」と読み、「太子」を「太った子」だからこんな名前を付けられてかわいそうと話したエピソードもあったようです。その彼女が、その後、猛勉強に向かっていくのですが、そこには様々な要因がありました。その中で1番の原動力となったのが「わくわく」(する気持ち)だったようです。それは、勉強を始めるのですが、小学4年生のドリルからやり直します。始めてみると新たな「わくわく」が生まれたそうです。“自分の知らないことを学ぶ楽しさ”に気づいたこと。物事は見方によっていろいろな解釈ができることが分かってきたと話しています。

その「わくわく」のもう1つとして書かれていることが、塾講師のT氏との出会いをあげています。本来は、弟が面談に行くはずの塾に、代わりに通う気持ちなど全くなかった彼女が行き、塾講師のT氏と会ってお話をする。その時「時間を忘れるくらい、自分をわくわくさせてくれる大人だった。」そうです。彼に誉められながら学習を進め、「こんな大人になりたい、こういう人がうじゃうじゃいる世界に行きたい。」と思ったようで、T氏のことを『マラソンでいえば、並走してくれるコーチのような存在。私のことを信じて「あと、ちょっとだぞ。」と声をかけてくれる。だから走り続けられた。』と、大きな存在であったことが窺われます。

そして、もう一人が、彼女を支えたお母さんです。家じゅうのお金をかき集め塾代を工面してくれた。お金の入った封筒の重みを思い出して「つらい」などと言っている場合じゃないと自分を鼓舞して学習に向かったこともあったようです。新聞には、お母さんの子育てに対する考え方も載っていました。お母さんは、自分が子どもの頃母親から厳しく育てられ、「友達と遊ぶ」「漫画を読む」など自分がわくわくするようなことは、母親に嘘をついてしていた。そのせいか、わくわくすることに罪悪感を覚えるようになったそうです。そして、何かをして叱られることを想像してやる気がうせるようにもなったそうです。親になり最初は叱る育児をしていたのですが、ある出来事からしかるという方法ではなく、「叱らない、認める、信じる」ということを心がけるようになったそうです。

読み終わり、「わくわく」という言葉がキーワードだったように思えました。彼女の周りには、気づかせてくれた方、支えてくれた人がいて、本人の頑張りが生まれ続けられたのだと思われまます。

先週、敷地内を歩いていますと、チョウセンゴヨウという木の下に球果(松ぼっくり?)が落ちていました。大きいので、子どもたちに見てもらいたいと手で持ったところ松脂でしょうか、くっついてきました。石鹸で洗ったぐらいではなかなかとれません。本校の森林学習に来て下さっている大山先生が教えてくれたのですが、この球果の中に入っているのが、私たちの食べる「松の実」だそうです。拾ったものにもいくつか入っていました。ずうっと以前のPTAの方々が「これからの子どもたちのために」と植えてくださったのでしょうか。今では大木となりました。いろいろな木を植えてくださりありがたい事です。

